

リュセット・リブルノア著、長沢和俊・伊藤健司訳
シルクロード。「絹シルク」文化の起源を
さぐる

榎 一雄

(一)

リュセット・リブルノア氏の「絹の道」(Luce Boulnois, La route de la soie, 317pp., Paris: B. Arthaud, 1968, cartes et illustrations)が出た時、ノリッ美術館(Freer Gallery of Art)のポップ(John Alexander Pope)氏はこれを評して大要次の如く述べた。

いわゆる「絹の道」は陸上・海上の両方で絹の取引を中心にして極東と地中海世界とを二千年に亘って結んだものである。本書はこの「絹の道」を通じて織成された歴史と説話とから一つの全体像を纏め上げようとしたもので、多少は成功しているが、その長い年代と広い地域とを考えれば、かなり散漫である。それは致し方がないであらう。

全体として読み易いものであるが、何等新しいものを付け加えようとしたものではない。往年支那歴史を学んだ

ことのある人々はその学んだところの大部分をここに見出すであらう。それらの人々にとって新しいのは、「絹の道」の向うの端の歴史即ちイラン・ビサンティウム・地中海沿岸・ヨーロッパの歴史から著者が抽出しているところである。紀元前一〇五(或いは一一五)年支那とバルティアとの間に使節が交換され、バルシア人が最初に支那の絹を買ってから、現在に至るまでの間に、ソ連・チェコスロヴァキア・東独及びフランスを含めて六十二の国々が年間五百万トンに当る価格の支那絹を買っているのである。

紀元三世紀には絹貿易はバルシア人の手中に握られ、五五三年にビサンティウムで始めて支那の蚕から絹が織られ、八世紀にはユダヤ人が地中海沿岸地域の絹貿易を完全に独占した。十二世紀までこの独占権はヴェニス及びジェノアのユダヤ人が大部分を占めるイタリア商人の手に帰し、絹はシシリイで織られていた。一二九五年、「イタリアの」ルッカ(Lucca)がヨーロッパにおける絹「生産?取引?」の首位にあった。一五四五年までに二人のイタリア人によってリヨンに最後の絹(生産)の首都が形成せられた。著者はフランス人一流の大袈裟な極り文句(extravagant cliché)でこれらの各段階のロマンティックな物語を語っている。

本書は些かも学術書たらしめていられるものである。学術書として扱われるものである。(There is no pretension to scholarship here, and the work needs not be so judged.)。本書は一般の人々に人類の歴史の興味ある一章を描くこの事実と幻想とを豊富に提供する「よき軽き読物」(Good light reading)であるというに止まる。書誌には一一の二次的論者の題目が並べられているが、その多くは既に古くなつてしまつたものである。地図十一、図版約五十。但し索引を欠く。(Journal of Asian Studies, XXIII, 2, February 1964, p. 313)

一九六六年、フランス語本に遅れること三年にしてその英訳がロンドンユニバーシティから刊行せられた。The Silk Road. By Luce Boulhois. London: George Allen & Unwin, 1966, and New York: E.P. Dutton & Co., 1966, 250 pp., Maps, Illustrations, Bibliography, Index がそれである。この英訳に対する批評が、ロムビエ大学のグッドリッチ教授によって発表せられた(JAS., XXVI, 2, February 1967, pp. 285-286)。教授は本書で見えるいくつかの誤謬を主として支那学の方面から指摘し、その批評を次のような言葉で結んでゐる。

この興味はあるが、不幸にして未熟な書物のカヴァー (dust cover) によると、著者はハリの国立東洋語学校

(Ecole Nationale des Langues Orientales) の卒業生で、ロムビエ語と支那語との修了証 (diplomas) をもつてゐるといふことであるが、私にはそれが納得出来ない。(I cannot understand it.)。ハリオはソルボンヌにおける中央アジアの諸國語と歴史との教授で、本書に触れられている題目の多くについて夥しい論文を発表しているが、本書では僅かに脚注の一つに一寸触れているだけで、[英訳本二二三頁＝フランス語本二七二頁＝日本語訳本三一頁注③]ハリオの論文も著書も一つとして「巻末の」書目の中には引かれていないのである！

グッドリッチ教授は絹を中心とする東西交渉史がなだらかに物語られていることをまづ認めながらも、次の諸点について疑問があるとしてゐる。

- (1) 殷墟出土の甲骨文に蚕・絹を示す文字のあることを述べているが、絹そのものが殷墓から出土していない事実に触れていない。(日本訳十四頁)。
- (2) 詩経國風の氓之蚩蚩に抱布買糸(布を抱きて絹糸に買える)の布を cloth の意味に解しているが、これは刀布 (spade money) のことである。(日本訳十六頁)。
- (3) 繭と養蚕技術の国外持出しは支那では嚴禁されていたというが、朝鮮や日本に伝えられている事実から考えると、それは疑わしい、私の知っている限り、それに関する

- る禁令は存在しない。(日本訳二〇・一七八—一七九頁)。
- (4)張騫の西域奉使は漢書に最初に記され、史記に竄入したものである、本書に書いているように史記に始めて記されたものではない。(日本訳二四頁)。
- (5)張騫は部下百人と共に壮途についたと記されているが、本文には百余人と書いてある。(日本訳二四頁)。
- (6)張騫は奉使から帰ってプリンスに任ぜられたと記されているが、正しくは太中大夫に任ぜられたのである。(日本訳二七—二八頁、但し日本訳では太中大夫の官位を与えられたとなっている)。
- (7)西海を地中海とのみ解するのは不十分である。これをペルシヤ湾・紅海に当てる説もある。(日本訳七五頁)。
- (8)「張騫の報告の」Li-shien「鞞韃。但し史記には黎軒 Li-hsien、漢書・魏略に黎軒・鞞軒 Li-hsien、後漢書・晉書に鞞韃」は大部分の東洋学者がローマであると相違ないとしている」と言っているのは言過ぎである。シリオは一九一五年に、ホウマリーダブス(Homer Dubs)は一九四三年に、これを奇術師と軽業師とで名高いエジプトのアレキサンドリアに当てている。(日本訳二九)。
- (9)「蜀の布と竹」〔漢書張騫伝・史記大宛伝という苴竹杖・蜀布〕については、キャンマン(S. Camman)氏は四川ではなく、インド東北部から来たものであろうという大胆な推測をしている〔のに、ブルノアはそれに触れていない〕。(日本訳二九—三〇頁)。
- (10)著者はラウファー(B. Laufer, Sino-Iranica, pp. 225-226)を引いて葡萄をギリシマ語 bodrus の音訳としているが、ラウファーは実はこの説に反対し、フェルガナ語 bu-daw 及びイラン語 budawa から出たものであるとしていっているのである。一九二二年、ペリオもギリシマ語音訳説を拒けている。更に最近では、一九五八年にチミエレウスキイ(J. Chmielewski)がフェルガナ語 badagla の音訳とすべきことを提唱している〔チ氏の論文は The problem of early loan-words in Chinese as illustrated by the word p'u-t'ao. In: Rocznik Orientalistyczny, 22, 1958, pp. 7-45 とされ、この若干の補記の見えり同じ人の Two early loan-words in Chinese. In: Irid., 24, 2, 1961, pp. 65-86 である〕(日本訳三四・四一頁)。
- (11)漢の武帝がコーカンドを攻めさせた時、コーカンドを助けた人々の中に「大秦からの技術者がいたが、この大秦はローマ帝国で、ローマ帝国のことが支那の歴史記録に見える最初である」とブルノアは述べているが、ここに言う秦人は支那人のことである。(日本訳三七頁)。
- (12)王莽の治世を著者は紀元九—二五年としているが、それ

は紀元二三年で終っている。(日本訳五三頁)。

(13) カニシユカの治世は、長く論争されているところであるが、一〇五—一二五年ではなくて、もう一世紀後であったであろう。(日本訳七九頁)。

(14) 著者は常に大秦をローマとしているが、そうと決まっているものではなく(unsetting)。ローマ領オリエント(Roman Orient)とするのがより安全である。(日本訳三七頁その他)。

(15) 後漢書は一二〇年ジャン(揮)国からの人々の到来を伝えていたが、著者が言うように大秦から来たとは書いていない。後漢書はもっと慎重である。曰く、「彼等は海の西から来たと言った、海の西とは大秦というに等しい」(即ち自から大秦から来たと言ったのではない、大秦云々は後漢書の編者の説明である)。(日本訳八五—八六・九〇頁)。

(16) 古代における支那の文物の西遷について記すに当っては、最近のパズイルイクでのロシア人の諸発見について触れるべきであったろう。「しかし本書では触れられていない」。

(17) パルティアの僧安世高をアルサケス王家の姻戚であったとしているが、それは確かでない、アンリイハマスベロオ(H. Maspero)が記しているように、イランの記録

には安世高をその自称するように王家の一族としているものは見当たらない。(日本訳一二〇頁)。

(18) 紀元一七五年に洛陽の石経から拓本が作られたという確証はない、拓本というものの作成はそれから数世紀後のことであろう、またその時に印刷が始ったわけでもない。(日本訳一二二頁)。

(19) 「著者は紀元三世紀に支那のジャンクがセイロンまで航行したと言っているが、」そうした事実は知られていない、支那の使節や求法僧は、少くとも唐代までは外国船を利用していたと思われる。(日本訳一四六一—一四七頁、なお九七頁参照)。

(20) 最後にもう一つ著者の「誤った」断定をつけ加えて、この批評の筆を擱こう、著者曰く、「屢々言われているように、支那人は非常に発明の才を有っているが、武器の面での発明は多くはなかった、彼等は戦闘の道具のすべてを隣族から借りた、彼等は火薬を発明したが、それを使ったことはなかった」(日本訳一六〇頁)と、最後にグッドリッチ教授は次のように述べている。

訂正を必要とするこうした点は沢山ある。その中には恐らく取るに足らぬものもあるであろう。しかしそれらは私をしてより確かな人が支那資料と中央アジアに関する最新の情報とについて取扱ったらよかったですであろうと思

わせるに十分である (There are many such points needing correction, some of them minor perhaps, but sufficient to make this reviewer wish that a surer hand had dealt with the Chinese material and the most recent information on Central Asia. p. 286).

(1)

ポウプ氏やグッドリッチ教授の批評を見て本書が学術的価値の不高くない通俗書であることを知った私は、敢えてそのフランス語原著も英訳本も注文しようとしなかったのであるが、今年出たその日本語による全訳を訳者の一人長沢和俊教授から恵与された。日本語は単なる翻訳ではなく、或いは本文の間に括弧に挟んだ細字の割注を加え、更に各章末に補注を加えて、解説訂正を施しているものである。しかも翻訳と割注の多くと補注の全部とは、シルクロードを通じての東西文化交渉史の最初の構成者を以て自ら任じ (『東西文化の交流、新シルクロード論』、東京、白水社、一九七九年一〇月刊、五頁)、美事な題名のついた多数の著書論文を発表しつつある早稲田大学教授長沢和俊氏の手になるものである。欠陥の多い原文は原文として、その誤謬と説明不足の部分については、現代の最高最新の研究段階に基づいて訂正が加えられ、補説が施されていること期待したのは、決して私ばかり

りではなかったであろう。しかしその期待は美事に裏切られた。そればかりではない。原書の誤謬が確認補強されている部分、更に原書を却って誤っている部分が少くないようである。こうした訳書を採上げて論ずることの大人気無さと時間及び労力の無駄とは十二分に承知しているが、日本のジャーナリズムが本書を如何にもフランスの碩学の手になる権威ある著述のように吹聴しているのを見ると、やはり一言した方がよいと思つて筆を執つた。但しフランス語の原書は日仏会館図書館で瞥見したのみであり、英訳本に至っては全く見ていない。しかし更めて両者を取寄せてこの日本語訳本と対校してみようという勇氣は全く湧いて来ないのである。

先づ原著についてグッドリッチ教授の指摘しているような誤謬は、教授の言う通り多いのであるが、そうした誤謬の性格は教授の挙げている所で十分に示されていると思われるので、それ以上一一拾上げることはしない。尤も教授の言っている所がすべて正しいとも言えないことにも注意すべきである。例えば、

(2) 詩経の抱布買糸の布は *peup* でなく刀布即ち貨幣であるとする教授の指摘は正しくないとはいえない。毛伝に既に「布は幣なり」と言い、鄭箋に「幣は物を買する所以なり」と説明している。しかし孔穎達の疏には抱くと言う以上貨幣ではおかしい、これは *coin* と解すべきであるとしている。

ンツ(J. Legge, 1871)・クーン(H.G. Creel, 1936)・カールグレン(B. Karlgren, 1950)の英訳に「すれ cloth」としているのは孔疏の解釈を是としたものであろう。日本訳ではこれに補注を加え、「布を小脇に糸貫えに」という和訳を紹介している。従ってブルノアの解釈は特に誤っているとは言えない。

(3) 繭や養蚕技術の国外持出しは死罪を以て禁止され、そのためにその秘密は他のどの秘密よりも数世紀永く保持されていたというブルノアの記述を否定し、繭が干闥に秘かに持出された説話はブルノアの引く唐書に初めて記されているのではなく、大唐西域記に始まるのであるとするグッドリッチ教授の指摘は正しいであらう。日本訳は原文のままに何等補注を加えていない。

(4) 張騫の最初の西域奉使の報告は漢書張騫伝に始めて載せられ、現行の史記大宛伝はそれに拠って書いたものであるという説は、オランダのホルスマ(H.F.P. Hulswé)教授と英国のロウマ(M.A.N. Loewe)氏が近年特に力説している。この説は(代表的な論考として)Hulswé, The problem of the authenticity of Shih-chi ch. 123. The Memoir on Ta Yüan, In: T'oung Pao, 61, 1975, pp. 89-147; Hulswé and Loewe, China in Central Asia. The early stage: 125 B.C.-A.D. 23, Sinica Leidensia, XIV,

批評と紹介 榎

Leiden: E.J. Brill, 1979 が挙げられる)。日本訳はこれについて何等補記するところがないが、果してフルスウェ教授等の言う通りかどうか、私は疑っている。太史公自序に「漢既に使を大夏に通ず、而して西極の遠蛮、引領して郷に内り、中国を覩んと欲す、大宛列伝第六十三を作る」とある。これによる限り張騫の第一回遠征のことは史記に記されていたと考えてよいのではなからうか。そのうち専論を出して詳しく論じてみたい。

(5) 日本訳には訂正を加えず、張騫の遣使については長沢和俊「張騫とシルクロード」(清水書院、昭和四七年)参照と補注している(三一頁)。

(6) 日本訳には「嚴密にいえば張騫は使命を果たせなかったが、皇帝はその功績を認め、数々の榮譽を与え、大中大夫の官位を与えた」(二八―二九頁)としている。大中大夫は太中大夫の誤植であらうが、原文はプリンスに任命したとある筈である。

(7) 西海をすべて地中海と看做す見解は日本訳でも踏襲されている。

(8) 軒轅が必ずしもブルノアが定説の如く言っているローマではなく、エジプトのアレキサンドリアであるとすると説のあることはグッドリッチ教授の言う通りである。しかしこの説の創唱者は白鳥庫吉博士である。それは明治三十七年(一九〇

四) 刊行の「大秦国及び扶桑国に就きて」に見えている(白鳥庫吉全集、第七卷一四三頁)。この点ツツドリッヂ教授は正確を願っている。しかし一層正確を願っているのは日本記であつて、黎軒ニアレキサンドリア説に何等言及してゐないのみか、ブルノアが漢代張掖郡にあつた驪軒といふ泉を漢の捕虜となつたローマ兵の町であるとするタヌス(H.H. Dubs, A Roman city in ancient China, China Society Sinological Series 5, London: The China Society, 1957)の思ふごとくとしか考へられない説を鵜呑みにしてゐるのを、そのまま認めてゐる(日本訳七五・七六・一〇六・一〇六二一六三・一七〇頁)。

(9) 邛竹杖と蜀布の産地が蜀ではなくインドの東北部であつたとするキャマン(Shuyler Camman)の提唱の理由が明かでないで、何とも言えないが、余程の蓋然性があるのならばとにかく、「大胆な推測」といふ程度の異説であるのなら、特に言及する必要はないであらう。日本訳にこれについて補注のないことは、非難すべきではなからう。

(10) しかし重要なのは蒲陶(蒲陶)の語源について説明がある。ラウファーによると、

ブドウ (Grape) を指す蒲桃 *bu-daw (後に葡萄) の名は張騫がフェルガーナで聞いて来たものであるから、フェルガーナ語である。それはイラン語 *budawa 或

うな *budawa であり、語根 buda は接尾辞 wa 或は awa がつたものから、私には buda は新ペルシヤ語 bāda ("vine")、古代ペルシヤ語 *barctāry* ("vine-vest")、中世ペルシヤ語 *barak*、新ペルシヤ語 *bārye* と関連してゐると考へる。また蒲桃 *bu-daw はマダガスカル語 *madav* ("wine from berries") の方言形 (a dialectic form) であり、考へて置かなければ。

これは前支那語葡萄をギリシヤ語 *bōtrōpus* ("a bunch of grapes") から出たとする見解が出たところ。最初これを示唆したのはトーマンハタック(W. Tomaschek, *Sogdiana*, In: *Sitzungsber. Wiener Akad.*, 1877, p. 133) であり、キングスマン(T. Kingsmill, In: *Journal of China Branch of Royal Asiatic Society*, XIV, 1879, pp. 5, 19) なども従つて、ユナエ(F. Hirth, *Ueber Fremde Einfüsse in der chin. Kunst*, München u. Leipzig, 1896, p. 28; and *Journal of American Oriental Soc.*, XXXVII, 1917 p. 146) がこれを支持した(endorsed)。しかしそれを真に考証した人はいない。(中略) 思ふに蒲桃(葡萄)と *bōtrōpus*, *bōtrōpus* トーマンハタック *budawa との間には何のつながり (connection) もないのである。(大意をこの)

これを引用してブルノア氏がラウファーがギリシヤ語起源説

を唱えているように記しているのは、グッドリッチ教授の指摘しているように全くの誤解である。これに対して日本語では次のような補注を加えている。

葡陶は古く蒲桃・葡萄なども標記された。その原音は古くキングスミル (Kingsmill) がギリシア語ポトルス *bōtrys* の音記としたが、今日では俗説として斥けられている。ヘーンによれば葡萄の原産地はカスピ海南岸地方で、原音はイラ〔ン〕語 *budawa*、または *budawa* に比定すべきで、ただちにギリシア語に比定すべきではない (V. Hehn; *Kulturpflanzen und Haustiere*, 7. Aufl., 1902, S. 92)。葡萄はカスピ海南岸地方から、一方は小アジアをへてギリシアへ、一方はフェルガーナ、パミールをへて中国に伝わったのである。(四一頁、※)

この補注を前引のラウフナーに比べて見ると、葡陶ギリシア語原説はトマシエックに始まり、キングスミルはそれを踏襲したものであって、補注の言う如く、キングスミルに始まるのではない。補注はヘーンの第七版を引いて、ヘーンが葡陶の原産地をカスピ海南岸に当て、その原音をイラン語 *budawa* か *budawa* かに比定すべしとしたことを述べている。ヘーンの第七版を見ることが出来ないが、手許にある第六版 (バルリン、一八九四年刊) と第八版 (バルリン、一九一一年刊) とがいずれもヘーン (1813~1890) の没後シュラーデ

ル (Otto Schrader, 1855-1919) 等が増補を加えたものであることから考えて、第七版も同じくシュラーデル等の増補版であり、補注にいう九二頁は六・八両版から考えて、ヘーンの本文ではなく、増補の部分であるとしか考えられない。いずれにしても、葡陶がカスピ海南岸の原産であることはヘーンの書いた部分 (6. Aufl., S. 70; 8. Aufl., S. 70) に見えるが、その原音についてはヘーンの書いた部分は勿論、シュラーデルの増補した部分にも何等記されていないのである。(シマヤーケルは *Wein* の語源は論じているが、*Weinbebe*, *Weinstock* を指すその他の名称の語源については記していない。なお O. Schrader-A. Nehring, *Reallexikon der indogermanischen Altertumskunde*, II, Berlin u. Leipzig, 1929, u. d. W. Wein 参照)。更にヘーンの説として紹介されているところが余りにもラウフナーに似ていることを考えると、補注者はヘーンとラウフナーとを混同しているのではないか。ラウフナーはその *Sino-Iranica*, Chicago, 1919 にヘーンの第八版を頻繁に引用し、「自分はヘーンを無条件に尊信しているものである」(Sino-Iranica, p. 206) と言っている位であるから、ヘーンに右のような意見があるのなら、或いはシュラーデルの増補部分にあるのであれば、それに言及していない筈はないのである。どう考えてもこれは訳注者の側の混乱である。

(12) 王莽の治世については、日本訳は原著の誤記をそのまま踏襲している。

(13) カニシユカの治世にはまだ定説がない。従ってブルノアの示す一〇五—一二五年も一説として採ってよいであろう。後漢書西域伝は班勇が西域長史であった時代(123~127)を下限とする記事であるが、その大月氏即ちクシヤン王朝に関する部分には丘就卻(却・劫)と閻膏珍(弥)即ち Kujula Kadphises, Wima Kadphises (= Wima Kadphises) 等 shka か挙げていながら、カニシユカ (Kanishka) 等 shka で終る名の系統はこの後に王位にいたと考えられる。従ってカニシユカの治世は班勇の時代以後にあるとすべきであろう。しかしそれがグッドリッチ教授の言うように三世紀にあってとは考え難い。班超が永元二年(90)に戦った月氏の副王射の射は ※shak と音じ、shka の音を示したもので、その名が shka で終る王のグループの最初の人即ち後のカニシユカであったであろうというのが私の意見である (A contribution to the chronology of the Kushans, In: Memoirs of the Research Dept. of the Toyo Bunko, 26, 1968)。この見解には一考に値するものありとする人もあるようである (H. W. Bailey, Dictionary of Khotan Sakā, Cambridge, 1979, p. XI)。いずれにせよ、カニシユカの年代に関する限り、特にブルノアの記事を訂正しなければならぬ理由はない。

い。但し日本訳はこれについて全く触れるところがない。

(14) 大秦について日本訳補注(一〇五頁※4、一五〇頁※3)ではヒルト・白鳥・藤田・宮崎市定博士等の研究があることを挙げてはいるが、その内容については全く触れるところがない。また日本訳は、後に記すように、大宛の貴山城(ブルノアはこれをコーカンドとする説をとるが、日本ではこのほかにカサンとする説があつて激しい論戦が行われた)に井戸を掘るために秦人の土木技師が備わっていた、その秦人を大秦国の人即ちローマ人とするブルノアの説の謬を訂し、秦人は支那人の意味であるとしているほか、必ずしも大秦を常にローマとはしていない(日本訳三七・四二頁、その他索引参照)。但し巻末の索引には「大秦(ローマ)」としてある。

(15) 日本訳の補注(九〇頁※9)には後漢書西南夷伝の原文を読み下しているが、それが誤っている。即ち、

永寧元年(120)、揮國王雍由調、復使者遣またして闕に詣らしめ、朝賀し、楽及び幻人を獻ず、能く変化し、火を吐き、自ら支解し、牛馬の頭(補注にはをと読む)易え、又跳丸を善くし、数乃ち千に至る、自ら言う、我は海西の人なり、と、海西は即ち大秦なり、揮國は西南大秦に通ず、

とある最後の「海西は即ち大秦なり」以下は、後漢書編者の説明である。補注では「海西は即ち大秦なり」までを揮國の

使者の言葉とし、「擇國は西南大秦に通ず」を削ってしまっている。これはグッドリッチ教授の指摘が正しく、日本訳は原著の誤解を正していないばかりか、原漢文を誤読することによってそれを正当化してしまっているのである。

(16) 日本訳ではパヅィルイクその他の考古学遺跡とその出土品について補説することはしていない。しかしこれは原著に触れられていないことであるから、特に日本訳を非難するには当たらない。補説があれば一層よかつたろうに思われるだけである。

(17)(18)(19)(20)については、日本訳は原著の誤謬をそのまま忠実に訳出踏襲している。

グッドリッチ教授は教授が誤と考えるこれらの諸点を例示し、同様の誤記が他にも沢山にあることを指摘し、支那資料と中央アジアに関する最新の情報とについてもっとよく通じている人が執筆に当るべきであると記していること前述の通りであるが、日本訳はそうした原著の誤謬と欠陥とを訂正補足して、日本の学者の實力と面目とを發揮すべき絶好の機会であった筈である。

勿論、日本訳が原著の誤謬を訂正しているところもいくつかある。右に掲げた(14)はその一つであるが、その他、年代を訂正し、原漢文史料を引用してブルノアの曖昧な記述を正したところ(例えば二四頁の張騫出発の年分の訂正、持節の意

味の確認、旅程に関する記述の訂正、三二頁※8の張騫の叙任に関する訂正、四二頁※4の大宛遠征についての武帝の計画や四三頁※7の年代の訂正、同頁※9や七九頁の原著の記述に根拠のないことの指摘、七一頁※3に見られる地理の是正、一九二頁※4・※5の原史料によるブルノアの記述の訂正、等々)も頗る多いのであるが、それらだけでは決して十分でないことは、グッドリッチ教授の指摘のいくつかが訂正されていないことから推察せられるであらう。さらに日本訳二〇七—二〇九頁の「ダイヤモンドの谷」については、白鳥庫吉博士の研究(「大秦の木難珠と印度の如意珠」、全集第七卷、五九七頁以下)があるのに、それを補説していないように、日本の学者の関連業績の挙げられていない場合が少くないのも惜まれる。

(三)

しかし、原著の誤謬の訂正や記述の補充の如きは、翻訳以外の事柄であるから、仮に措いて問わないとしても、最も不思議に感ずるのは翻訳そのもの、就中翻訳の底本である。

凡例によると、「本書は Lucette Bouthois: La Route de la Soie, Arthaud, Paris, 1963 の全訳である」とあり、「訳者あとがき」によると「本書はフランスの『パリ・アジア協会』会員リュセット・ブルノア夫人著『シルクロード』(La

Route de la Soie)の全訳である」(三三四頁)更に「本書はまず英語版がわが国に伝えられた。即ち L. Boulois; The Silk Road, translated by Dennis Chamberlin, George Allen & Unwin Ltd., London, 1966 である。本書を一読して興味深く感じた私は同僚の伊藤健司氏(現鹿児島短期大学助教)に下訳を依頼した。本書の原本は百方手を尽してもなかなか見当らなかつたが、幸い数年後に日仏会館付属図書館に架蔵されていることが分り、原本との対訳は筆者が行なつた。その際、原本に欠けていた漢文史料を搜索して、ややくわしい補注を附した」(三二六頁)という。長沢教授は昭和五三年(一九七八)三月発行の東洋学術研究第十七巻第二号(九八一—〇六頁)にルース・ブルノア著、長沢和俊訳注として、「リモン——最後の絹の首都」と題する一文を掲げ、

この拙訳はルース・ブルノア著『シルクロード』(Luce Boulois; La Route de la Soie)第十六章「リモン——最後の絹の首都」(Lyon, dernière capitale de la soie)の訳注である。

と「まをがき」している。ルースはリュースの「Luce」は「Luce」のそれぞれ誤植であろう。苦心搜集のフランス語原本はこの時以前に長沢教授の手に入り、その一章が訳出せられたのであって、英訳本からの日本訳との「対訳」もこの頃行われたのであろう。いわゆる「対訳」の意味は必ずしも明らかでない

いが、恐らく対校して日本訳に誤なからんことを期したものである。しかし日本訳は余りにも多く英訳本の遺響を残している。固有名詞の標記が殆どすべて英語風であるのは、読む者の理解を容易ならしめる配慮からであろうが、支那文の書物のタイトルを英訳で示し、(in Chinese)と記し(二〇頁原注(1)その他)、ロシア語の引用書のタイトルをフランス語に訳して示し(in Russian)と記しているのは(三二頁注(e)その他)、フランス語原本にはそれぞれ(en chinois, en russe)とあつた筈である。特にロシア語の書籍の場合(in Russian)とあるのはよびとして、時に(in Russia)としてあるのは恐入るのである(七〇頁注27、二二頁注1)。それはどちらでもよいとして、いわゆる「対訳」が必ずしも十分に行われていないことを示す一例は、右の東洋学術研究に発表せられている訳文がそのまま(正確に言えば長沢教授の加えた三つの短かい訳注の一つを削除して)今回の日本訳に入れられ、しかもフランス語原本に比べると、一部分脱けている箇所があることである。即ち、右の第十六章の書出しは、フランス語原文によると、

宗教改革とルネサンス、大「発明」(即ち更に正確には羅針盤・航海器具・舵・印刷術というヨーロッパの諸発見)の行われた第十五、第十六世紀は、ヨーロッパの中世(Moyen Age)の終末と歴史家のいわゆる近代(Temps

modernes)への発展 (Vantée) を示している。

とあるが、長沢教授の日本訳 (二七六頁) には

ヨーロッパの十五世紀と十六世紀——ルネサンスや宗教改革、そして羅針盤、航海器具、舵、印刷術などの発明や発見があった——は、歴史家が近代と呼ぶものの嚆矢であった。

とあって、ややニュアンスを異にするようである。英訳がフランス語原文に頗る忠実なことはブッドリッチ教授が述べているところであるので (JAS, XXVI, 2, 1967, p. 286) この相違は英訳からの十分正確でない日本語訳が、フランス語原本との「対訳」によって十分正されなかった一例と見るべきであらう。

いずれにしても、英訳本からの翻訳であるのなら、その旨を明記すればよいのであって、フランス語原文から訳したような、或いは少くともそれと十分に対校したようなボースを取る必要は少しもないではないか。訳文の正確性は十分明かでないが、例えば二十頁第二行に「卵や繭を中国から持出すことは、死罪をもって禁止されていた」とある「卵や繭」は「卵、言い換えれば繭」とあるものの誤訳であるのかと見ても、決して高いものではあるまい。

それに「見して直ちに気がつくのは数多い誤植である。誤植をなくすことは至難に近いが、本書には少し多すぎぬよう

である。

フランス語本では注に引用せられた参考書の類は、書誌 (Bibliographie) として巻末に一括されている。英訳本でも同様である。しかし日本語訳では各章末の注に著者名・書名・刊行地・刊行年代を示してある。これは便利であるが、原書巻末の書誌との照合が極めて不注意に行われた結果、若干の誤が犯されている。例えば第四章注(31) (七〇頁) にセデーヌの著書を挙げて

G. Coedes; Les Etats hindouisés d'Indochine et d'Indonésie, Paris, 1910

とあるが、これは刊年を1948年とすべきものである。(本書はブルノフの書の出た翌年1964年に新版が出た。) 1910年というのは、セデーヌの別の著書

Textes d'auteurs grecs et latins relatifs à l'Extrême-Orient depuis le IV^e siècle avant J.-C. jusqu'au XIV^e siècle, Paris, 1910

の刊年である。こうした誤の中で一番無責任であると感ぜられるのは、第十二章の注(1) (二二二頁) に引く

Pigoulevskaya; Sculpture and fresco of ancient penjakent, Moscow, 1959 (in Russia)

である。フランス語本のこれに並べたことには

Sculpture et fresco de l'antique Pyandjikent

とある。そして巻末の書誌(三〇七頁)には

Sculpture et fresco, de l'antique Pyandjikent, Moscou, 1959 (en russe)

とあって著者名は記されていない。これは

A.M. Веденский, В.Л. Воронина и П.И. Костров, Скульптура и живопись Древнего Пянджикент, Москва, 1959

を指す。巻末の書誌にビグレフスカヤの著書に続けて挙げられているので、同じ人の著書だと誤解したのである。右に続へ注(3)もひどいものである。

(3) ソ連科学アカデミー『ソ連邦小史』第十四巻、ソグド史の項

とあるが、フランス語本によると、第十四巻は「十四巻本の」(Gen 14 volumes)、「ソグド史の項」は「ソグド史を扱った巻」とある。(日本訳二五五頁注(6)のソヴィエト科学アカデミー編「ソヴィエト小史」第一四巻というのは正しいのであろうか。)

そうした誤のほかは、例えばアミアヌス・マルケリヌス(Ammianus Marcellinus, Ammien Marcellin)を一個所で「アミアヌス、マルケリヌス」とし(五五頁)、他の数箇所と索引とはすべてマルケリヌス・アミアヌスとしていることなどが目立つ。「対訳」が正確に行われていればこうした誤は防げた筈である。

そうした誤にもまして惜まれるのは、著者ブルノアとフランス語本に序文(日本訳では「推薦の辞」となっている)を寄せたドミエヴィル教授に関する訳者の無知である。「訳者あとがき」の中に長沢教授は言う、

本書はフランスの「バリ・アジア協会」会員リュセット＝ブルノア夫人著『シルクロード』(La Route de la Soie)の全訳である。ブルノア夫人はフランスの中央アジア史の碩学ポール・ドミエヴィル教授の高弟であるらしく、本書の巻頭にはドミエヴィルス「ユの誤植」教授の推薦の辞が掲げられている。(三一四頁)

ブルノア夫人がバリの国立東洋語学校でロシア語と支那語とを修得した人であることは、米国版英訳本のカヴァーに書いてあるというが、夫人がドミエヴィル教授の高弟であるらしいというのは、文字通り長沢教授の推定である。しかし、ドミエヴィル教授をフランスの中央アジア史の碩学とするのは何に拠ったのであろうか。ドミエヴィル教授はフランスの支那学・支那仏教史学の大家であって、論著が頗る多いが(第六二回東洋文庫展示会、昭和五四年十二月一・二日、目録七一―一四頁)、中央アジアに関するものは一篇もない。没後出た追悼録にも教授に中央アジアについての研究のあることは全く記されていない。(Young Pao, LXV, 1-3, 1979)に見えるヂェルネ J. Gernet 教授等、更だ Journal Asiatique,

CCLXVIII, 1-2, 1980 に見えるソフィエ M. Soyminé 教授による追悼記事参照)。長沢教授は何に基づいてドミニエヴィル教授を中央アジア史の碩学と言われるのであろうか。

またリュセツト (Lucette) はリュニス (Luice) の愛称形であるが、フランス語本・英訳本いずれもリュニスリプルノアになっているのが、日本語とそれに対する原著者序文にはリュセツトリプルノアになっている。その理由も知りたいものである。

要するに本書は通俗な原著の極めて不用意で粗雑な訳としか言いようがない。巻末に索引がつけてある点は原著の欠を補ったものと言えるが、クシャン・クシャン王国・クシャン朝・クシャン帝国、大秦(ローマ)・大秦国が並んでいる所から察せられるように、それは整頓せられた索引ではなく、脱ちも少くないようである。最も不思議なのは巻末につけられている「シルクロード小事典」なるものである。これは一体プルノアの本文とどういう関連にあるものなのであろうか。また如何なる標準で選ばれた項目なのであろうか。

長沢教授はいわゆるシルクロードブームの中にあつて、「こうした時流に流されることなく、あくまで厳密に着実なシルクロードの実証的研究を積み重ねたいとひそかに自戒しているものである」(三二三頁)という。しかし、本書はそうした自戒にまるで逆行しつつある教授の実態を示しているも

のとしか考えようのないものである。

訳書において先づ求められるのは、内容を正しく伝えることである。そして必要があれば適当な補記を加えて、内容をより完全にそして up-to-date にする事である。この意味で一つの模範になるのは、ロートステイン (Marian Rothstein) 夫人によるルフェーネル (Lucien Lefebvre, 1878—1956) の訳 *Life in Renaissance France*, Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press, 1977, pp. XX+163, With notes, bibliography and index である。訳者は周到な訳文に加えるに原注に何十倍かする補注を以てし、この研究に関する学界最新の水準を示している。こうしてこそ訳書としての意味があり、仮に通俗書であっても学術的な価値を発揮させることが出来るのである。残念ながら本書にはそうした用意も意気込みも感じられない。感じられるのは、君達にはこれで十分なのだ、「シルクロード小事典」というおまけもつけてあるではないかという、読者を甘く見た訳者の一方的な姿勢だけである。

(一九八〇年七月、河出書房新社、B六版、三六三—三六四頁)